

〈実践報告〉

農作業における子どもの「体験」と「学び」を結ぶ支援 — 「信大YOU遊プラザ」に見る学生の実践 —

志村昌之 坂城町立南条小学校

土井 進 信州大学教育学部教育家科学講座

Support of Connecting Experiences of Farm Work with Children's Learning

SHIMURA Masayuki : Minamijo Elementary School, Sakaki Town

DOI Susumu : Faculty of Education, Shinshu University

Through learning experience of farm work at “Mure School Farm ” and “Mosuge School Farm ”, I have found three points important : First, to consider the meaning of cooperation with community and the process of learning useful knowledge. Second, to learn fundamental knowledge and skills from the community. And third, to set a situation of learning related to experiences of farm work.

【キーワード】 農作業体験学習 知的好奇心 学習への意欲 地域連携 人間形成

1. はじめに

子どもの育ちにかかわって自然体験や農作業体験の重要性が多くの中で言われている。筆者も、学校現場で学級園などを活用して、毎年のように農作業体験学習を行ってきたが、農業に対する知識不足、体験と学びの関係についての見通しの甘さなど、多くの問題を感じていた。今年度、内地留学という貴重な機会を与えられ、「信大YOU遊プラザ」の「信大牟礼ふるさと農場」「信大茂菅ふるさと農場」において、学生や地域の方々子どもたちの農作業体験にかかわってきた。ここでの筆者の立場は、これまでの経験を生かして農作業や子どもたちへのかかわり方などについて学生を支えたり、地域の方々の指導によって農作業についての知識や技能を学生とともに学んだりしていくという、いわゆる参与観察を念頭においたものである。本稿は、筆者が学生の活動にかかわりながら実践したことの中から、子どもたちの「体験」と「学び」の結びつきへの学生や地域社会の支援について考察するものである。

2. 研究の課題

農作業体験学習を行う場合、農作業に関する基本的な知識や技能、体験を通しての子ど

もの学びについてのビジョンが不可欠である。これらが無いがために、「単なる“まねごと”だ」とか「体験だけして何も残らない」などの批判が出る。そこで、指導者としては、子どもの知的好奇心や学びへの意欲を引き出し、人間としての成長を促していく場や地域社会との連携をコーディネートしていく場の設定が大きな課題である。これらは、学校での「生活科」や「総合的な学習の時間」などの実践においても十分考慮していかなければならない課題でもある。そこで、「信大 YOU 遊プラザ」の「信大牟礼ふるさと農場」「信大茂菅ふるさと農場」にかかわる子どもたちや学生の活動とその背景にある地域社会との連携について、具体的な場面を抽出し、子どもの体験と学びを結ぶ学生の企画や地域社会との連携の意義を探ろうと考えた。これにより、農作業体験学習を進めていく上で、体験にともなって子どもが知的な気づきをしたり学びへの意欲を持ったりしていく過程を明らかにし、学生や子どもたちの実態を踏まえて、農作業について専門的な知識や技能を持っている地域の方々と連携のあり方を明らかにしていく。さらに、農作業体験そのものや“学校知”的な学びの範囲に止まらず、人間関係の構築、人間性の向上、生きる力の育成という視点からとらえた「体験」や「学び」の意義についても明らかにしていく。

3. 「信大牟礼ふるさと農場」「信大茂菅ふるさと農場」での実際

(1) 「体験」と結びついた子どもの「学び」の姿

筆者が学生と共同で、農作業体験と関連させながら子どもたちの学びにつながるような学習を企画した事例について述べてみたい。

1) 稲刈り 2001.9.29 於「信大茂菅ふるさと農場」参加者（子ども 30 名、学生 17 名、林部信造氏（地元農家）、大内清氏（JAながの営農指導部）、丸山成志氏 JA（長野中央会農政広報部）、中村公弘氏（JA長野中央会農政広報部）

① 作業内容

・稲刈り鎌による稲刈りとはぜ掛け

② 学習の企画「お米の収穫にかかわる学習」

・「米」という漢字の「八十八」への分解と作業工程の説明

・はぜ掛けから天日干しの米の味への効果の説明

・国際協力田とマリ共和国の位置や特徴の説明

漢字については、一つの文字を分解してその意味を探るというユニークな方法で、天日干しについては、自分たちが行った作業が米の味をよくすることにつながるということで作業の意味づけができ、子どもたちにとって興味あるものとなった。さらに、マリ共和国については、作業を通して体験したことと未知なる世界や国々がつながることとなり、身近な田んぼと世界、マリ共和国がつながったと考えられる。

③ マリ共和国のクイズから国旗に興味を持った SA 児の姿から

「(前略)クイズでマリきょうわ国のことをやりました。アフリカにあってお米があんまりとれないところです。だから、ここのお米をすこしわけておきます。うちへ

かえって地図ちようでもう一どみました。地図のまわりにいろいろな国の国きがありました。でも、マリきょうわ国の国きはありませんでした、国きを見ていたら、自分でもかいてみたくなりました。マリきょうわ国の国きもしらべてみたいです。」

稲刈りの後、SA児（小3男子）が書いた作文である、SA児は、稲刈りにおいて行われたマリ共和国に関するクイズをきっかけにして、世界地図や世界の国々、とりわけ国旗に興味・関心を持ち、その後、図鑑によりマリ共和国をはじめとして多くの国や国旗について調べるようになり、家庭で購入した事典で国旗を調べては家族に“国旗クイズ”を出して楽しんでいた。また、地区育成会でのお楽しみ会では、賞品の選択においても迷わず地球儀を選び、興味・関心の高さを示していた。そして、学校でも学年末の学習発表会で友達に“国旗クイズ”を出したり世界地図による国旗の紹介をしたりするなど、国旗に対する興味や関心を持ち続けていった。

2)脱穀 2001.10.20 於「信大茂菅ふるさと農場」参加者（子ども30名、学生15名、大内清氏（JAながの営農指導部）、林部信造氏（地元農家））

①作業内容

- ・脱穀（足踏み脱穀機による脱穀体験と機械による脱穀の手伝い）

②学習の企画

- ・脱穀、精米について
- ・もち米と粳米の違いについて
- ・脱穀の道具と機械について
- ・雑草や藁に化学肥料や水を混ぜての堆肥作りについて

子どもたちの興味の中心は脱穀機だった。特に、実際に自分で稲を持って脱穀した足踏み脱穀機の経験は大きな感動を呼んだ。また、脱穀や精米についての学習では、米ぬかについてAY児が「おばあちゃんが床磨きに使っていた」と答え、何気なく見ていた祖母の行為と脱穀や精米による“米ぬか”と結びついた瞬間であったと考えられる。

③脱穀の方法の違いやもち米と粳米の違いに興味を持ったSA児の姿から

「(前略)足ふみだっこくきを足でふみながら回してそこについたわらをそこにいれてお米だけをとっていきます。わらと米がまざったら、ざるで風がふいたらわらだけがとびました。もう一つの機械はエンジンで動いて米とわらをべつべつに分けてくれます。うるち米ともち米のちがいは、うるち米はどうめいで、もち米は白色です。ぼくは、どうしてちがう色なのかなあと思いました。これをごはんにしたらおいしいなあと思いました。(後略)」

脱穀という作業を初めての体験し、足踏み脱穀機と機械による二つの方法を知り、自分で体験することで、機械や道具の構造を実感することができた。特に、足踏み脱穀機について林部氏が説明してくれたことや自分で構造を確かめることができたことで、脱穀の過程をより強い実感を持って学ぶことができたと考えられる。日記

の最後には、二つの脱穀機の絵も描き、関心の高さが表れている。また、もち米と粳米の違いについて、林部氏の説明や自分でも手で剥いて確かめたことで、大きさや色という視点から客観的な認識を持つことができたと考えられる。こうしたことから、稲がお米として自分の口に入ることとつながり、「ごはんにしたらおいしいなあ」という自分なりの素直な感情を表現することができたと考えられる。

3)蕎麦の刈り取り 2001.10.13 於「信大牟礼ふるさと農場」参加者（子ども 28 名，学生 20 名，保護者 9 名，竹元清春氏（牟礼村ふるさと振興公社））

①作業内容

・蕎麦の刈り取り，サツマイモ掘り，にんじん掘り

②学習の企画「蕎麦にかかわるクイズ」

- ・蕎麦の名前の由来について（「稜」（「とがっている」の意味）→蕎麦
- ・栽培面積と収穫量の関係について（1a で 40 人分）
- ・蕎麦の刈り取りや脱穀（刈った後の実を落とす方法），蕎麦の実の保存方法
- ・蕎麦の脱穀（殻を取ってそば粉にしていく過程）

子どもたちは、稲刈り鎌を使って刈り取っては運ぶという作業を黙々と行っていた。中には、親子や友達、学生とで、刈ることと運ぶことを分担して行う姿も見られた。そして、最後に一人一袋ずつ蕎麦の実をお土産として配り、保存方法などについてお話していただいた。「来年までとっておいて、蒔いてみよう」と、親子で楽しそうに話しながら帰っていく姿が多く見られた。

③蕎麦刈りに集中し蕎麦と雑草の見分け方で自分なりの視点を持つ SA 児の姿から

「そばかりをしました。いねかりに使ったいねかりがまをつかいました。一回目に切ったらザックザックと切れてすごかったです。まちがえてざっ草まで切ってしまうてこまりました。そばのくきの色は赤色です。そばのくきについているたねを手で引っぱってたねをとりました。その作業が一番楽しかったです。」

蕎麦と雑草の茎の見分け方について、茎の色の違いに注目していった様子を書いている。似たような茎の蕎麦と雑草をまちがえてしまうことから、蕎麦と雑草の見分け方という課題を持って、茎の色の違いに注目し、解決していった道筋がわかる。このことから、SA 児が真剣に集中して作業に取り組んだ様子もわかる。集中して「体験」したことで、間違ってしまう自分を見つめ直して、色の違いという客観的な視点を定めるという自分の「学び」を深めていった姿として注目したい。

4)蕎麦打ち体験 2001.11.24 於レストラン「山ぼうし」（牟礼村ふるさと振興公社経営）参加者（子ども 31 名、学生 12 名、保護者 13 名、竹元清春氏（牟礼村ふるさと振興公社）、レストラン「横亭」（牟礼村ふるさと振興公社経営）の職人さん 3 名

①活動内容

・蕎麦打ち体験 「おもいでしゃしん」の返還（1 年間の反省）

②学習の企画

・蕎麦打ち体験（水加減，こね方，切り方など）

職人さんたちが，適宜グループを回り，水加減，こね方，切り方など作業のポイントを指示したり，手本を示して補助したりして活動を進め，学生や保護者がそれをフォローする形で進めていった．蕎麦打ちの後，試食し，どの子も満足そうだった．試食の後，学生がまとめた「おもいでしゃしん」を子どもたちに手渡し，子どもたちが農場での活動について楽しかったことやがんばったことを発表した．

③蕎麦のこね方や蕎麦切り包丁などの道具に興味を持ち，友達とかかわりながら作業を進めたSA児の姿から

「(前略)そばの作り方を教えてくれた人が、『水を半分のこしてまずこねるように』と言いました．それから少しずつ水を入れてこねていきました．耳たぶのかたさがいいそうです．ゆであがったそばを食べたらすごくおいしかったです．ほうちようは，ふでばこぐらいの重さでした．大きさはティッシュのはこくらいでした．」

水加減，こね方，切り方などを職人に教わりながらグループで協力して蕎麦打ちをした．SA児にとって大きな驚きは蕎麦きり包丁の大きさであり，筆箱の重さやティッシュの箱の大きさという自分の経験の範囲内の知識と関連させて考えていた．また，SA児のグループでは，自然な流れですべての段階作業をすべての子が経験した．友達がやっている様子を見守り，「だんだん固まってきたね」「切り方がほそくてすごいね」などと，声を掛け合っていた．

4. 子どもの「体験」と「学び」を結ぶ学生と地域社会の支援

(1)学生の取り組み

子どもの「学び」の背景として，農作業体験を主催するに当たっての学生スタッフの取り組みについて述べてみたい．

1)学習の企画

表1 農場における学生スタッフの学習の企画

【信大茂菅ふるさと農場】

	活動内容	作業と関連した学習内容
4月21日(土)	ジャガイモの植えつけ	ジャガイモクイズ(ジャガイモの原産地, ジャガイモの花)
5月12日(土)	れんげで遊ぼう	れんげの花のお話(れんげの花の紹介, 花束の作り方) 草笛作り, 田んぼの周りの草花調べ
6月2日(土)	田植え	お米クイズ(米の原産地, 籾一粒から取れるお米の量, お米の花について) 土クイズ(海岸の砂, 田んぼの土, 何もなしの三種類の水の透過性についての実験)
9月29日(土)	稲刈り	お米の収穫について ・「米」という漢字の由来→八十八に分解→八十八もの(たくさん)の作業があるという意味 ・はぜ掛けの意味や天日干しの意味 ・マリ共和国の位置(クイズ): 国際協力田として送るお米について, マリ共和国の特徴についての説明

10月20日(土)	脱穀	脱穀, 精米についての説明(粳→玄米→白米の精米の過程, 粳穀, 米糠の用途, 脱穀の方法) もち米と粳米の違い 脱穀の道具と機械について
12月8日(土)	注連縄作り	注連縄の由来、意味の劇

【信大牟礼ふるさと農場】

4月28日(土)	ジャガイモの植えつけ	ジャガイモクイズ
5月26日(土)	サツマイモの苗植え	サツマイモクイズ(サツマイモの原産地, サツマイモの花, サツマイモのでき方)
7月14日(土)	蕎麦の種蒔き	紙芝居「カエルくんのお手紙」
10月13日(土)	蕎麦の刈り取り	蕎麦クイズ(蕎麦の名前(「稜」「とがっている」の意味)→蕎麦)の由来 栽培面積と収穫量(1aで40人分)

前述した学習の企画事例や表1にあるように、農作業活動においては必ず学生が学習の企画を行った。そのときの作業や季節などに関連させ、年齢的にある程度幅のある子どもたちが興味を示せるように、クイズ形式にしたり、紙芝居を行ったりして工夫していた。

2)「農場パスポート」

農作業活動の1～2週間前に活動への出欠確認を兼ねてすべての子どもたちに往復葉書で送る。内容は、作業の日時、場所、活動内容、持ち物、出欠確認、子どもたちにメッセージを書いてもらう欄などである。すべて学生の手書きであり、一人ひとりに宛名を書いて送る。「農場パスポート」をもらった子どもたちは、出欠の返事とメッセージを書いて返送してくる、時には、保護者からのメッセージもあり、「普段は見れない笑顔が見れてとてもうれしいです」と、学生にとって励みになるものがある。

3)活動計画の立案

子どもたちとのかかわりを中心に据えて、活動計画を立てていった。学年や男女のバランスを考えてのグループ編成をしたり、活動を有意義なものにしていくために時間配分を考えたりしていった。例えば、蕎麦の刈り取りとにんじんやサツマイモの収穫、脱穀とサツマイモやこんにゃくいもというように複数の作業を組み合わせていった。

4)考察(学生の動きから見えること)

子どもたちを支える学生の活動を支えているものは何かと考えると、地域の自然を生かして、子どもたちと触れ合いたいという熱意があると考えられる。授業の空き時間、昼休み、放課後、時には夜遅くまで打ち合わせをすることもある。こうした苦勞は、実際に作業に臨んだ時、子どもの手をとってやり方を教えたり、泥まみれ、汗まみれになって作業をしたりすることや、子どもたちがいっしょうけんめい作業に取り組んだり、クイズを真剣に考えて学生とやり取りしたり、楽しそうに紙芝居を見たりすることで、大きな喜びに変わっていった。「心と心のつながりが持てたようでうれしい」「いっしょに活動できたとき、自分を信用してもらったような気がする」などの学生の声からわかる。学生が子どもに求めているものは、作業がうまくなるとか、何か特別なことをきち

んと覚えてもらうということではなく、作業を通しての人間的な触れ合いや人間的な成長を願ったり、学習の企画を通して、知的好奇心や学びへの意欲を持ってもらいたいということである。まさに、「生きる力」の育成ということになる。

(2)地域との連携

(1)で述べた学生の企画や活動については、子どもの学びが効果的に結びついた背景には、地域社会との連携がある。牟礼村ふるさと振興公社、JAながの、JA長野中央会などとの連携によって、農作業の基本的な知識や技能の習得を図っていった。

1)学生の実態

現代の学生は、家庭や学校などで一般的に栽培する作物や使用する農具について知らないことが多い。こうした学生が、子どもたちにかかわっていかうとしても、子どもたちの好き勝手にやらせたり、安全への配慮が欠けたりするなどの問題が出てくる。そこで、筆者は学生たちと相談の上、農場の活動で連携している地域の方々をお願いして、作物の栽培や農具の使い方について指導の場を設定していくこととした。

2) 学生を対象にした指導

【農具使用についての指導講習会】

- ① 日時 5月14日(月)午後3時30分～5時
- ② 場所 信大茂菅ふるさと農場 ③ 参加者 学生17名
- ④ 指導者 林部信造氏(地元農家)
- ⑤ 活動内容・講習の様子

表2 三つ又、鍬、鎌の使い方(林部氏のご指導)

用途	三つ又	鍬	鎌
	田や畑を起こす	畝作り	
具体的な使い方・注意点	腰を入れて深く刺し、てこのように起こして土を持ち上げる。	紐で目印をつけて鍬の刃に合わせるように土を盛る。両側から盛る。	・手や指を切らないように草を逆手に持つ。 ・刃を滑らせるように右斜め手間に引く。 ・刃が45～60度くらいに傾けて置き、柄を膝で固定し、左手を刃のうら側に当て右手で砥石を刃の角度に合わせて研ぐ。初めは粗い砥石で、仕上げは細かい砥石で研ぐ。

⑥ 学生の感想から

- ・ 三つ又と鍬は同じように使うものというイメージがあったが、目的によって道具をきちんと使い分けることがわかった。
- ・ 三つ又でてこの原理で起こすとスムーズに耕せるが、腰を入れて耕するのが難しい。
- ・ どうしても鎌を正面に引いてしまう。最初の段階できちんとしたやり方を身につけることが大事だと思った。
- ・ 鎌を研ぐときの押さえ方や刃に合わせた角度に砥石を滑らせることなどがわかった。林部さんが手を添えてくれたので体で覚えることができた。
- ・ 鎌の手入れや鍬やみつまたのほぞのかいかた、ぬらしてから使うことなど道具を大事にすることもきちんとしなければならぬと思った。

【稲刈りに向けての作業・講習】

① 日時 9月27日(木), 28日(金) 午後4時~6時

② 場所 信大茂菅ふるさと農場 ③ 参加者 学生14名

④ 指導者 林部信造氏(地元農家), 大内清氏(JAながの)

⑤ 活動内容・講習の様子

- ・ 雀除けの網はずし, 網の収納:(横一列に束ね, 端から三つ編みにして巻いていく.)
- ・ 藁の縛り方: 8株で1束を作る. 縛る藁は選っておき, 根元を水で濡らしておく.

⑥ 学生の感想

- ・ 網の収納は理にかなっていてコンパクトに収納でき次回の使用にも出しやすく工夫されている. 先人の知恵に学ぶものがある.
- ・ 一株一株丁寧に刈れた. 藁で縛っていく方法もコツがわかることがわかった. くるっとねじるだけだが, けっこう丈夫に縛れるものだった.
- ・ 天日干しは米の味がよいと聞いた. 手間はかかるかもしれないが機械に頼らないこういう方法の方がかえって有効なこともあると思った.
- ・ 林部さんから差し入れていただいた柿がおいしかった. 別の用があっても私たちのために駆けつけたり差し入れしたりしていただいたとき, 本当にありがたい. また, 林部さんとお話をしていると, 自分の家族といるような懐かしい気持ちになる.

3)子どもたちとの農作業での外部講師としての指導

【サツマイモの苗植え】

① 日時 5月26日(土) 午前10時~11時30分

② 場所 信大牟礼ふるさと農場 ③ 参加者 子ども7名, 学生14名

④ 指導者 竹元清春氏(牟礼村ふるさと振興公社)

⑤ 活動内容・指導の様子

- ・ 50cmくらいの間隔でテープを張りその両側から土を盛って畝にする.
- ・ 30cmくらいの間隔で, 10cmくらいの深さの穴を掘って, 茎を寝かせるようにして植える. そのとき, 葉が土につかないように気をつける.
- ・ 植え終わったら, たっぷり水をやる. 穴に水を入れて植える方法もある.)
- ・ 寒さ対策として寒冷紗を掛ける.

⑥ 学生の感想から

- ・ 畝作りで, テープを張って列をそろえて両側から鍬を使って土を盛っていくことが大変勉強になった.
- ・ 畝の間隔, 苗の間隔, 植え方など基本的なことがわかった. 寒さや水分などデリケートなこともあることがわかって, それらに対する対処も経験できてよかった.
- ・ 鍬は耕すだけのものかと思っていたが, 畝作りの場面で使うということがわかった.
- ・ 鍬の使い方上手な子どもがいた. 家庭や学校で農作業に慣れている子もいる.

4) 考察

基本的なことをきちんと教わるということは重要なことである。また、先人の努力や工夫が生み出したすばらしい知恵や技術を実感している。このように、豊富な体験と専門的な技術を持っている方々から実際の体験を通して学んだことで、学生が自信を持って子どもたちを指導していくことができ、子どもたちの学びを引き出すことにもつながったと考えられる。さらに、地域の方々との触れ合いにも注目したい。単に知識や技術を教わるだけでなく、指導者の方々の人柄に触れたことも貴重な経験であり、「学び」の場と位置づけることができる。学生や子どもたち一人ひとりの手をとって教えたり、時間的な面で無理を承知でお願いしても快く引き受けてくれたり、時には差し入れをしていただきみんなで輪になってご馳走になり、時間を忘れて語り合ったりするなど、人間的なお付き合いもさせていただいた。「全ての生命を愛する心とやさしさを学んだ」という学生の感想がそれを的確に言い表している。物心両面の支援も学生や子どもたちの心に残ることとなった。

5. 総括的考察

第一点として、知的好奇心や学びへの意欲を引き出す場として、そのときの体験と関連づけた企画が有効であるということが言える。国際協力田とマリ共和国のクイズ、脱穀における、機械と足踏み脱穀機との比較体験、もち米と粳米の違いの提示、脱穀や精米の過程、蕎麦打ちにおける手順や道具など、様々な題材の提示が工夫されていた。子どもの実態を考慮して、興味・関心の持てそうな題材を取上げていくという実践的指導力が重要である。自ら課題をつかむことで、SA児やYA児のように主体的、意欲的に追究して認識を深め、他へ働きかけていくことなどで、人間形成の上でも注目すべき効果が見られた。

第二点は、地域の指導者の方々から生きた知識を学び、「生きる力」をつける場としての有用性である。学生が、地域の方々から農作業にかかわる基本的な知識や技能を学ぶことで、先人の努力や工夫が生み出したすばらしい知恵や技術を生きた知識として学び、子どもたちへの指導に生かす「生きる力」につながっていくものとなる。また、地域の方々から直接指導されたり学生を介したりして子どもたちに伝えられていくわけで、子どもたちにとっても生きた知識として蓄積され、「生きる力」として働いていくことになる。そうした意味で、地域社会との連携は重要であり、農作業体験学習では欠かすことができないものとなる。

第三点として、人間関係の構築、人間性の向上の場としての位置づけである。農場には子ども、保護者、学生、地域の人々など様々な立場の人々が集まり、作業を通して様々なかかわりが生まれる。学生の立場から見ると、地域の方々から単に作業を教わるのだけではなく、その人柄から多くのことを学んでいった。こうした交流によってお互いの心が通じ合い、時には、無理も言い合える関係にまで絆も深まっていった。子どもたちや保護者の立場から見ると、友達の立場を考えて行動する姿や、子どもの成長の姿を温かく見つめ

ること、親子や友達、学生で作業の分担したり、友達のよさを認めて声を掛け合ったりしていく姿、作業の後、田んぼや畑に感謝して一礼する姿などがある。これらの姿から、自然や人とかかわる「体験」を通して人間形成の上で重要な「学び」が見て取れる。

以上のように、農作業における「体験」と「学び」の結びつきの場の工夫と効果が明らかになった。農作業において、それと関連した題材の提示や地域社会との連携により、子どもたちに知的好奇心や学びへの意欲を持たせ、人間関係の構築をはかり、人間性を向上図っていくことで、「生きる力」を育てていくことができると考える。このような「体験」や「学び」は、教室や家の中では決して得られない。特に、「総合的な学習の時間」が本格的に始まる学校現場、学校週五日制が完全実施される地域、それぞれの場所で様々な活動が始まろうとしている今、農作業による子どもたちの「体験」を「学び」に結びつけ、子どもたちの「生きる力」を育ていけるかどうかは、教師の実践的指導力の向上、地域の教育力や社会力の蘇生が大きなカギとなる。

文献

土井進（2001）「信大茂菅ふるさと農場と信大牟礼ふるさと農場の創設」『信州大学教育学部 学部・附属共同研究報告書』

門脇厚司（1999）『子どもの社会力』（岩波新書）

佐野安仁 新茂之 芝野昭男 吉田健二（2001）『「総合的な学習」と人間形成』（晃洋書房）

嶋野道弘（2001）「空っぽの箱にあなたは何を入れるか 食農教育で「総合的な学習の時間」を創ろう」『食農教育 2001年10月No.16 臨時増刊号』（農山漁村文化協会）

高山博之（1995）「社会科における思考力・判断力の育成」（文部省中学校課・高等学校課編集『中等教育資料』No.657 pp.12-17 大日本図書）

佐島群己 奥井智久編（1992）『新訂 生活科授業研究』

（2002年3月31日 受付）